■研究十二月往来〈262〉

起請文の神々

佐藤弘夫

今年も多くの寺社が初詣での人々でにぎわった。年頭にゆかりある寺社に詣でて、よき年の到来を祈ることは、いまや日本の国民行事になっている。しかし、そうした特別の時と場を除けば、私たちの日常は宗教とは無縁である。熱心な信仰者でもない限り、普段の生活のなかで神仏の存在を意識することはほとんどない。日本人がしばしば「無宗教」の烙印を押されるゆえんである。

しかし、この日本列島でも、時間を遡れば、神仏が日々の生活のなかではるかに大きなウエイトを占めている時代があった。謡曲が誕生した中世はまさにそういった時代だった。

文芸作品でも、古文書でも、日記でもいい。試みに中世に書かれた文字史料を一つ繙いてみれば、私たちはそこに展開する神仏の世界の濃厚さに圧倒される。中世人は神仏の存在を感じ、その声を聞きながら日々の暮らしを送っていた。現代人にはなかなか想像できないことだが、宇宙の根源には神仏―超越的存在が実在して、その意思がこの世界を動かしているというのが、中世人がもつリアルな実感だったのである。

そのため、中世では人がなにごとかをなそうとするときに、神仏がきわめて大きな役割を果たすことになった。ことあるごとに神仏の意思を確認する手続きが取られた。実力勝負と思われる戦の日時さえも、神の託宣が優先された。人間同士が取り交わした約束事も、最終的にそれを監視する役割を担うことになったのは神仏だった。

そうした中世の精神世界を背景として生み出されたものに、起請文という文書がある。起請文とはある事柄を神仏に誓うとともに、もしそれが嘘だったらそれらの神仏の罰を受けてもいいという文言を記した文書である。起請文の起源についてはいくつかの説があるが、十二世紀ごろには形式も整い、以後中世を通じて身分・職業を問わず膨大な数が作成された。

謡曲『正尊』ではこの起請文がたいへん重要な役割を担っている。頼朝・義経兄弟の不和が表面化するなかで、土佐坊正尊は義経暗殺の密命を受けて、義経の滞在する京都に上った。その意図を弁慶に見抜かれ、問い詰められた正尊は、その場を逃れるべく殺意がない旨を神々に誓って起請文にしたため、朗々と読み上げるのである。

私たちがなにげなく聞き流しているこの起請文であるが、そこにはたいへん興味深いいくつもの問題が隠されている。まず、注目してほしいのが、誓約の監視者としてどのような神が登場しているかという点である。『正尊』では、梵天・帝釈を筆頭に、閻魔法王、天照大神、伊豆山神社、箱根権現、浅間神社、熊野、金峰山などの神々が勧請されている。

一般的に言って、起請文に登場する神のなかで、圧倒的に数が多いのは日本の神である。ここでも日本の神のトップに位置する皇室の祖先神・天照大神以下、たくさんの神祇が名を連ねている。神々のなかでも、起請文にはその執筆者と関わりのある神が登場する場合が多かった。天照大神の後に出てくる伊豆山神社、箱根権現、浅間神社は、いずれも鎌倉幕府にゆかりの深い東国の神社であり、鎌倉から来た正尊が勧請するにふさわしい神々である。北条泰時が著した有名な「御成敗式目」の起請文にも、このうちの伊豆山・箱根二社が勧請されている。

さて、このようにみてきたとき気になるのは、日本の神々の前に登場する梵天・帝釈天と閻魔法王である。梵天と帝釈天は、仏教とともに大陸から渡来した仏教守護の神々である。他方、閻魔はいうまでもなく地獄の支配

者であるエンマ大王である。

梵天と帝釈天はどの起請文でも、例外なく勧請される神々の筆頭に位置づけられている。前近代の社会では名簿の序列はたいへん重要であり、リストの先頭に位置するということは、勧請神のなかでもっとも格の高い存在であることを意味した。これらが日本の神々の前に登場するのはどのような理由によるものだろうか。

この問題を考えるためには、当時の人々が共有していた世界観を理解することが不可欠である。中世人の思想に大きな影響を与えた仏教的な世界観によれば、私たちが住むこの現実世界は「娑婆世界」とよばれていた。娑婆の中央には、須弥山という巨大な山がそびえ、その須弥山の上空には娑婆世界を支配する梵天の宮殿があり、そこから下に向かって層をなすように帝釈天・四天王などの住む世界があると考えられていた。娑婆世界の地下には重い罪業を犯した死者が行く地獄があり、閻魔法王はその主宰者だった。この完結した現実世界のなかで、その頂点に位置する存在が梵天だったのであり、それが娑婆の辺境にある小島日本を守備範囲とする神祇の上位に位置するのは、当然だったのである。

それでは閻魔が、梵天・帝釈天と日本の神の中間に位置するのはなぜであろうか。その背景には、閻魔法王が、日本の神よりも娑婆世界の広汎な地域をカバーしているという観念があったことが推定される。閻魔王は、「日本」という枠を越えてより広範な人々に力を行使することができると信じられていた。国籍は異なっても、死者は同じ閻魔王によって裁かれたのである。

にもかかわらず、閻魔法王はこの世界の地下にあって、そこから抜け出せない点において、地表を離れて空中から娑婆世界全域を監視する梵天や帝釈天を超えることはできなかった。無造作にリストアップされているようにみえる起請文の神々の間にも、一定の約束事にもとづく厳格な上下の序列が存在していたのである。

日本の中世は、死後にこの娑婆世界を離れて彼岸の浄土への往生を目指す浄土信仰がきわめて盛んな時期だった。しかし、起請文には極楽浄土の阿弥陀仏といった他界の仏が、絶対に勧請されることはなかったのは興味深い。

先に私は、中世人が私たちの住むこの世界を娑婆世界とよんでいたことを述べた。しかし、当時の人々が想定していた世界は、この娑婆だけではなかった。宇宙には他にも無数の世界が存在し、極楽世界には阿弥陀仏、浄瑠璃世界には薬師仏というように、それぞれの世界に一人ずつの仏がいると信じられていた。ちなみに娑婆の仏は釈迦仏であり、その入滅以降この世は仏のいない時代だった。娑婆世界以外のそうした他方浄土の仏は、起請文には決して登場することがなかったのである。

ただし、東大寺の大仏や石山寺の観音といった、具体的な形をもってこの世に存在する仏像は勧請される場合があった。当時の人々には、仏像は娑婆世界内部の存在であり、仏というよりは日本の神と同質のものと認識されていたのである。

起請文の神は誓約がきちんと履行されるかきちんと監視し、違反者には激しい懲罰を下すことが期待されていた。そのため勧請される神々はその存在を生々しく思い浮かべることができ、その視線をリアルに感じ取れるものである必要があった。正尊が身近な東国の神を勧請したのはそうした理由からだった。起請文の神が遠い他界の仏ではなく、梵天以下の娑婆世界の神々に限定されていたのも、同じ理由によるものだったのである。

起請文は中世文書の代表とされるが、江戸時代以降も作られ続けられた。しかし、時代が下り社会の世俗化が進行するにつれて、人々はしだいに神仏の存在のリアリティを感じ取れなくなっていった。それは起請破りが被る宗教的な罰の重みが、しだいに実感できなくなっていくことを意味した。その結果、古典落語の「三昧起請」にみえるように、起請破りの罰はまがまがしい業病や堕地獄ではなく、熊野でカラスが三羽死ぬといった俗的で軽い内容へと変化していくことになるのである。

さとう・ひろお　東北大学教授。専門は中世日本思想史。著書に「起請文の精神史―中世世界の神と仏―」（講談社選書メチエ）等がある。